



2006年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量											
	漁獲	産地	輸入	輸出	消費地			消費支出	在庫	加工		
					生	冷	塩	生(千)		塩干	塩蔵	缶詰
17	236	198.9	0.62	14.3	45.2	8.2	7.5	2,447	44.5	23.2	17.5	
18	246	208.5	0.48	26.2	39.4	8.7	7.8	2,272	46.5			
%	104	105	78	183	87	106	103	93	105	0		####

年	産地	価 格					全サンマ		
		消 費 地	輸 入	輸 出	水 揚	価 格	消費支出		
		生 冷 塩					生(円)		
17	65	295	231	437	175	75	229.7	65	1,547
18	69	327	207	439	195	76	240.0	70	1,479
%	106	111	90	100	111	101	104	108	96

漁獲の動向と資源

日本のサンマ漁獲量は1990～1997年に23万～30万トン程度であり、高水準で安定していた。しかしながら、1998、1999年漁期には約14万トンで1997年漁期の半分程度の漁獲に留まった。2001、2003年漁期に26万トン台の漁獲を記録したが、2000、2002、2004年漁期は20万トン程度の漁獲に留まっており、2005年は23万トンの漁獲があった。近年、ロシア・韓国・台湾・中国など外国の漁獲量が急増しており、2005年の日本のシェアは5割弱まで低下した。

2006年漁期前調査の結果によると、西経165度～日本の沿岸に分布しているサンマの資源量は、約4,468千トンで、豊漁であった2005年と同程度とみとめられている。また、近年のサンマの0歳魚加入量は安定しており、歴史的にみてCPUEも高水準にあった。よって、サンマ太平洋北西部系群は、未利用資源を多く残した余裕のある状態であるといわれている。1980～2006年のCPUEで検討すると、2006年は、27年間で2位で資源水準としては、高水準と判断されている。また、近年（2004～2006年）の資源量水準が安定しているため、資源動向は横ばいと考えられている。

18年の漁獲量は前年を上回る約24.6万トンであった。

本年は前年の魚価の暴落を受けて業界の合意の中、片口選別機をはずした。また各種休漁措置は前年同様実施され、積荷・荷受制限も含め漁期終了まで漁獲の平準化のための休漁措置が講じられた。）

本年は前年より1日遅く7月9日から流し刺網、同24日には5トン未満船の棒受網、31日及び8月3日（ロシア水域に入域しない漁船が31日）には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして棒受網の20トン未満小型船が8月15日、同40トン未満中型船が8月18日、同40トン以上大型船が8月23日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は昨年並みの漁であった。

その後8月中旬以降も概ね低調の推移で経過した。また盛漁期の9月に入ってから例年のように好漁（前年より良い）となり、水揚げ制限、積荷・荷受制限や休漁措置等も随時講じられ、また燃油代の高騰による省エネ休漁もみられるなど外的条件の変化も重なり、大臣枠の消化もあり実質的には11月24日をもって終漁となった。

本年の初期漁場は昨年同様10トン未満船が釧路南東沖合で始まり、8月に入ってから道東

近海と択捉沖合に形成された。

9月の下旬に入ってからロシア水域、漁場が終漁し、道東近海と一部久慈から宮古近海にも形成された。10月に入っても月上旬に主漁場は道東～襟裳岬近海で、下旬に入ってから三陸沿岸に移り道東は襟裳岬南東沖を一部のこしほぼ消滅した。11月には道東沖合漁場が完全に消滅し三陸南部、常磐から鹿島灘に主漁場が形成された。下旬には塩屋崎近海のみとなり、昨年を上回り終漁となった。なお、本年のオホーツクでの漁は、3隻15トンの水揚げであった。因みに昨年は皆無であった。

魚体長は、8月の中旬に中型、大型であった以外は、漁期全般を通じて大型(29cm)主体の組成で通算では大型58%(92%)、中型27%(7%)、小型15%(1%)であった。

魚価は、初漁期の7月が昨年を下回ったものの、8月には漁獲が伸びず高値となった。9月に入ってから漁獲の急増がみられ、価格は2桁台に急落した。10月も順調に水揚げが続き、引続きじり安展開となり、11月に魚価の若干の回復があったが、結果として67円で前年(65円)をやや上回って推移した。

こうした安値の背景には全漁期を通じて漁獲物の大型魚への偏りがあり、生食需要が10万トンといわれている中でこれを大きく越えた結果を反映したとみられており、片口イワシ選別機の是非も取りざたされた。

在 庫 量

本年も極めて高水準の6.6万トンの越年在庫から始まった。こうした高い在庫水準であったために新漁前の6,7月においても前年を約5千トン以上多かった。そしてこの傾向は例年在庫が最も少なくなる7,8月においても前年より若干多かった。しかしその後は、漁が順調だったものの、加工原料や輸出に回ったりしたことで、9月末以降在庫は昨年を下回って推移し、その結果越年在庫も5.4万トンと前年(6.6万トン)を大幅に上回った。

平均在庫量は、前半の多かった在庫を反映し4.6万トンで前年(4.5万トン)をやや上回り、近年でも16年に次いで多い水であった。

消費地入荷量と価格

18年の消費地入荷量(10大都市)は、4.8万トン(生3.9万トン、冷0.9万ト)と生鮮消費が少なく前年(5.3万トン、生4.5万トン、冷0.8万トン)を下回った。

本年は、好漁だったが選別機の撤去と大型の割合が少なかったこともあり、全体的に少ない入荷に終わった。

本年は前年に比べ産地での特大サイズが少なく、45尾、50尾サイズ主体の入荷であった。

また、本年の塩干物の入荷は0.8万トンで引続き前年(0.8万トン)並みであったが、若干増加した。

本年も価格のピークは7月にみられ、8月に入って一昨年以上の急落場面もみられ、その後は各月とも前年を下回る推移であった。

平均価格は生327円(前年295円)、冷207円(前年231円)、塩439円(前年437円)で、生鮮は産地価格同様やや上昇したが、冷凍は昨年の安値を受けた格好で前年をやや下回り、加工品は大きな変化はなかった。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、数量、金額とも前年を下回った。

輸 出 入

本年の輸入は、480トンでほぼ前年(619トン)並みであった。

これは本年も安定した国内生産と豊富な在庫が背景に合ったことが要因である。

輸出はH4年をピークに近年減少傾向が続いているが、本年は2.6万トンと前年(1.4万トン)をかなり上回った。

価格は、輸入195円(前年175円)、輸出76円(前年75円)であった。

本年の輸出は、韓国が最も多く約3分の1の8769トンで中国から首位の座を奪回し、続いて中国、タイ、フィリピン、米国、サモアであった。